

進修同窓会々報

発行 土浦一高進修同窓会

編集 同窓会会報編集委員会

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋4-4-2

TEL (029) 822-0137(代) FAX (029) 826-3521

ホームページ <http://www.sin-syu.jp/>



土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠 馬 作曲

一、沃野一望数百里 関八州の重鎮として
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水

二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声訝えて 湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の氣を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の気魄あり

四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

目次

2面	会長あいさつ
3面	学校長あいさつ
3面	平成25年度総会報告
3面	卒業60周年記念同窓会
3面	卒業50周年記念同窓会
4面	新任事務室長紹介
4面	卒業40周年記念同窓会
4面	卒業25周年記念同窓会
5面	恩師を訪ねて
6面	卒業生レポート⑮
7面	創立百二十周年記念事業
8面	卒業15周年記念同窓会
8面	支部会・同期会だより
9面	母校だより 職員室だより
10面	部活動報告
11面	進路状況報告等
12面	平成24年度決算報告等



同窓会会長あいさつ

幡谷 浩史

(高4卒・併2)

例年にならない猛暑、異常気象を思わせる酷暑日が続きましたが、会員の皆様は如何お過ごしでしょうか。益々お元気で過ごしの事とご推察申し上げます。お陰様で当会最大事業の名簿の作成、発行も無事終了いたしました。関係各位のご協力、ご支援に感謝いたします。今後も5年毎に名簿の発行を予定しておりますので、その折は宜しくお願い致します。

さて、旧本館は、震災被害と老朽化により激しく傷み、雨漏り等も目立ち始め、期間限定の一般公開、開放には心もとない状態です。現状の保守管理(予算関係等)では、残念ながら老朽化を止めるに至りません。そこで、本年度は県当局の指導の下、旧本館の全面的な調査をお願いしております。その結果に基づき、旧本館活用委員会を中心に対応、対策を行かなければなりません。伝統校に相応しい記念館(全国では旧制富山農学校・現南砺福野高校他数校のみ)の後輩達に誇りを持って引き継いでもらう為にも、しっかりとした管理運営体制を構築する所存です。

さらに、当会の使命である生徒会部活動等の支援の他、在校生の海外派遣研修会も継続して実施致します。米国東部地区ボストン、マサチューセッツ大学を始めNY、ワシントンDC等の見学研修により、異国での在外同窓生の活躍を実感し、大いに見聞を広め、学校生活に活かされることを念じます。

ところで、直近の県の発表によりますと、4人に1人が65歳以上の高齢者となり、合わせて少子時代が進み、人口減は看過出来ない状況にあります。年間26・5万人の減、大まかに云い換えると、1年で水戸市の人口、10年で茨城県の人口(約30万人)が消滅する事になります。労働人口減に悩む国と同様に、会員減少は当会運営の最大の懸念材料であります。同窓生のつながりの中から、減少を逆手にとる新しい発想が生まれ、日本の衰退に歯止めをかけるきっかけになることを期待します。人口減少は学校当局の運営にも厳しく、学区や学校の統廃合も更に進行する事必至です。そんな中でも、存在感のある誇れる伝統校「土浦一高」に学ぶ学生が、立派に成長し続ける事と、同窓生には記念館を中心に和気藹藹とした交流の輪が広がることを願っています。



学校長あいさつ

学校長 豊崎 利明

進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また日頃より本校への多大なご支援を賜り、誠にありがとうございます。

私は、本年度より武井秀一前校長より本校校長を引き継ぎました豊崎利明と申します。私は本校25回卒業で、今年卒40周年で昨年より事務局長をし、準備を進めて参りましたが、4月に本校校長を命ぜられ、急遽忙しい年度初めを迎えることとなりました。本校には過去に教員、教頭としてもお世話になりました。これまでのご恩返しができたという思いで毎日进行しております。

私は大学院在学中に「教えて生徒が分かり、感謝される喜び(「教える喜び」)」を知った事が契機で工学系の道から教育への道に進みました。大学で2学科専攻し、さらに他学科を聴講したことは生徒の進路指導にも役立ちました。今も生徒たちにこれからの生き方を考えさせるよう心がけています。

本校の魅力は一言で言えば「人」です。地域の優秀な子ども達を集めた生徒達、個性豊かで有能な教師集団、ここで基礎を学び、社会で活躍しているOB、OGの方々、どれもが本校の魅力です。その魅力を持ち続けるため、生徒達にはModel case of Lifeの精神の下、日夜「頭鍛え 身体鍛

え 心鍛え」る毎日を送らせています。一高祭(文化祭)、一高オリンピック(体育祭)、歩く会(28km歩行)の本校3大行事もその精神を継承し、生徒による企画運営が本校の伝統です。部活動も盛んで約9割が部活動に加入しています。どの部も元気で、運動部の多くが県大会に出場し、水泳部、弓道部は関東大会に出場しました。文化部も盛んで今年の全国高等学校総合文化祭には弦楽部、地学部、写真部、将棋部が出場しました。中味の濃い授業を理解するには予復習が欠かせません。本校は学習館を夜8時まで開け、生徒の学習を応援しています。

また本校は定時制を併設しております。専任の教師集団で構成され、落ち着いた雰囲気の中、生徒達は作りたての温かい給食を食べ、勉強に部活に頑張っています。今年は大田県大会にバドミントン、ソフトテニス、剣道、陸上部が出場しました。このように一高生は今も元気でいます。私も本校の果たすべき役割を自覚し、毎日生徒のために奮闘している先生方を支援する所存です。日頃より温かいご支援を頂いております同窓会の皆様に感謝申し上げますと共に、今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年度

進修同窓会総会開かれる

去る4月14日(日)、本年度進修同窓会定期総会が、母校土浦一高体育館において、祝賀周年卒業生等の510名の皆様のご出席を賜り、盛大に開催されました。

総会は、応援指導部の元気凛冽なリードと吹奏楽部の演奏による、校歌、応援歌、一高讃歌の斉唱で開会。物故会員への黙祷の後、幡谷会長・豊崎校長の挨拶があり、長瀬副会長の議長による議事に移り、平成24年度事業報告及び決算報告、平成25年度事業計画及び予算、規約改正(役員数の増員・総会は原則として4月第二土曜日等)、役員改選、創立120周年記念事業、日本館校舎改修促進事業等が、審議のうえ、可決承認されました。この後、役員退任者2名に対する感謝状贈呈と、同窓会の助成により実施された第4



回生徒海外研修

(Science Explorers Group 2013)の報告が代表生徒によつてなされました。(詳細は土浦一高HP)

続いて、卒業60周年(高5回・定3回)、卒業50周年(高15回・定13回)、卒業40周年(高25回・理数2回・定23回)、卒業25周年(高40回・理数17回・定38回)、卒業15周年(高50回・理数27回・定48回)の節目を迎えた学年の卒業周年祝賀式が行われました。ここでは、高16回の石田栄一氏より祝辞、会長より記念品贈呈と続き、最後に高15回の山田隆士氏が周年招待者を代表して謝辞を述べられました。

この後、会場を移動して懇親祝賀会が、周年ごとあるいはグループごとに催され、往時を懐かしみ、旧交を温める交歓が和やかに繰り広げられました。



卒業60周年記念同窓会

高校卒業六十周年の春を迎え、四月一四日は好天の式典日よりとなり、十年ぶりに母校に向かった。

懐かしい正門を進むと慣れ親しんだ旧校舎が視界に入り、あのモダンで厳肅な旧本館玄関が迎えてくれた。受付後参集してきた多くの同窓仲間と暫らくぶりの再会を喜び合ったが、出席した奉寿目前の同窓生は、計七一名であった。

記念式典は、吹奏楽部の勇壮な演奏の中、巨大な応援団旗を打ち振る応援部員たちの演奏と校歌斉唱に続き、物故会員への黙祷が行われた(同窓物故者は七八名)。幡谷同窓会長からは祝辞が述べられ、豊崎校長は祝辞とともに、在校生が勉学と部活動の両面で励んでいることを報告された。

祝賀会は、市内のホテルに移動し、卒業六十周年の同窓生のみくつろいだ雰囲気で行なわれた。野球部西谷恒男君の司会で始まり、大塚正男君の開会の言葉、大病を克服した黒田光夫君の幹事代表挨拶、酒井良治君の東京代表挨拶と続き、北島正和君の乾杯の音頭で祝宴に入った。旧友によつては何十年ぶりの再会もあつて、美酒の酔いとともに多く



新任職員紹介

事務室長 寺田 眞



今年度四月より進修同窓会の会計を仰せつかりました寺田です。伝統ある土浦一高の発展のため、微力ながら事務局の務めを果たしてまいりますので、よろしく願いいたします。

祝賀会は久保田武夫君の司会で始められ、五十周年の記念品デジタルフォトフレームの写真集「友とありて」の上映がなされました。

私たち十五回生は、卒業二十五周年にビデオ「わが青春ここに在り」を制作し、また四十周年には記念誌「Next Horizon」さらなる地平をめざして「Next Horizon」を作成しました。そして今回の「友とありて」は、私たちが一高に入學してから卒業までの写真、卒業以来行われた九回の同窓会と二回の集会の集合写真やスナップ写真を抜粋収録したものです。特に、高校入試の合格発表の写真、遠足、体育祭の仮装行列、部活動風景など、思いがけない写真や懐かしい写真に五十年の歳月を忘れ、高校時代に戻ったような気分になりました。また今回の幹事担当クラスE組が「高校三年生」を合唱しました。映像と歌で、私たちは若き良き時代を思い出し、ちよつぱりほろ苦い思いに浸りました。

卒業50周年記念同窓会

土浦一高15回卒業 齋藤 勝

高校を卒業して夢のように半世紀が過ぎ、私たち高校十五回生も卒業五十周年を迎えました。桜の花は散り葉桜となった四月十四日、旧本館の前に百二十名の同級生が集合しました。

平成二十五年度進修同窓会総会に続き祝賀式が開催され、祝辞と記念品の贈呈を受けました。進修同窓会副会長の山田隆士君が各回を代表して謝辞を述べました。

会場をホテルマロウド筑波に移した祝賀会には、恩師の矢口四郎先生、池井芳寛先生、川村安宏先生、雨谷昭先生、鶴巻勝夫先生、五名の先生方にご臨席賜りました。先生方のお元氣なご様子に、古希を目前にした私たち一同も、元氣と勇氣をいただき大いに励まされ



土浦一高卒業50周年の春を迎えた4月14日は、式典日となり懐かしい十余名の朋友が相集り、旧交を温めることができました。総会終了後の祝賀式では、ご丁寧なお祝いの言葉と、記念品まで頂戴し、誠にありがとうございました。式の後、天清くば店において、恩師の後藤直和先生を囲み同窓会を催しました。不肖私共の、司会進行の言葉、物故者への表挨拶、恩師の祝辞、乾杯と移り祝宴が始まりました。

3面からの続き
周年記念同窓会を目指し、元気で再会しようとして、散会しました。最後になりましたが、土浦一高、進修同窓会の益々のご発展を祈念し、お礼の言葉といたします。



私たちは、昭和35年4月入学時は百名の同級生も卒業時は47名と当時の社会情勢では厳しかったのかと思います。思い出すのは、「停電とローソク」「だるまストーブ」「真鍋の坂の上りと下り」「体育はいつもバスケットとバレーボール」、文化祭での演劇部員の熱演は観衆の涙を誘い、舞台装置は大工職の友の手を借り力を分け合いました。同級の友は、思い出に50年ぶりの再会に、同じ時代に同じ場所学び遊んだ者同士、学生時代に戻り会話が弾みます。

若き日の、記憶を蘇らせ、当時の思いを確かめ合おうと余念がない様子です。部活動での秘話は、正に学生時代へのタイムスリップとなり、いやがうえにも、盛り上がりを見せました。1964年東京オリンピックの「夏」が終わると、その歪へ入り込んでいきます。豊かではなかった時代に、四年間の学生時代を辛抱し、全うできたこと、又そのような環境を作っていたのだ、職場の皆様の絶大なご理解、ご支援、家族の支え、同級生の励み、そして何より恩師の慈愛あふれるご指導と鞭撻があったからこそ、感謝の念で一杯でございませう。いろいろな事情があつて、昼間は、社会人として働いた上で、勉強し教養を身につけたいと思う人たちがほとんどです。

働きながら学ぶ中で、大変勉強させられたことは、一人はどんな険しい峠でも超える力を持つていた。そして、苦しみ乗り越えた人ほど強くなれることを！。生きている限り一杯生きていること、世の中のために生きていること、他人のために生きていること、私事でありますが、ボランティア活動を通じております。民生委員として15年目の活動、また、高齢者の生きがいづくり、健康づくりの活動として劇団を作り、老人ホームなど高齢者福祉施設利用者をお招きし、各市町村の文化ホールで、お芝居の公演をすでに26回重ねてきました。「オッス」と右手を挙げた挨拶だけで「暫く」「暫くでした」「元氣だね」な

どの意味が含まれているのです。参加者は少なかつたが、旧友との語らいは元気を蘇らせ、仲間が翼を休めに来る。お里の止まり木のようなものです。思い出話や、健康のことなどに話が弾み、これから毎年開いてより絆を深めようと約束し散会しました。来年は、古希を迎えることになりませんが、健康には十分気を付けてお互いに励ましあつて、社会に貢献できますよう精進してまいりたいと思ひます。同窓生のご健勝と益々のご活躍とともに母校並びに進修同窓会の発展を祈念しております。

卒業40周年記念同窓会

高校を卒業して40年となる今春催された同窓会は、二つの出来事とともに、その年月の流れを記憶に留めてくれた会となりました。一つ目は、同窓会を控えた二月末、3日同級生だった柳澤靖男君から連絡が入りました。「進修同窓会祝賀会への謝辞を書くことになり、旧本館を訪ねてお話を伺うことになったので一緒に行きませんか」とのこと。



当日は進修同窓会ご担当の方の案内で、互いに高校生活を思い出しながら、なつかしく教室を巡ることができました。併せて震災で大きなダメージを受けた旧本館の状態も分かり、修復に向け同窓会で検討中である旨も伺いました。二つ目は、今回のまとめ役を担当されていた同期生の豊崎利明君が、記念同窓会開催を目前にした四月一日付で、私たちの母校である土浦一高校長として着任されたことです。同窓会前日、旧本館復元教室にて開催された「第一回文化活動」に参加して知りました。当日祝賀式で、彼は学校を代表して私たち出席者を迎える役回りをされました。諸先輩や後輩のみなさんを前にして、さぞかし緊張されたのではないかと察しますが、同期生の私にとっては記憶に残るよい思い出の一場面となりました。同窓会総会・祝賀式の後、ホテルマロウド筑波に会場を移して、同期生に分かれ、和気あいあいの祝賀会となりました。恩師の先生方や同期生の中にも、すでに鬼籍に入られた方、消息不明で連絡のとれない方などもおられ、とても残念に思いました。15年前の同窓会の時とは、それぞれの風貌にも還暦を前にした年輪が感じられましたが、話し始めると瞬く間に高校時代に戻れ、思い出話がつきません。次回10年後、同期生の大半は、第二・第三の人生を新たに送っていることでしょう。その折は、今回出席された方々だけではなく、都合がつかず欠席された恩師や同期生たちとも再会できることを楽しみにしています。それまではICTを活かしたSNSなどのつながりも合わせ、さらに広げていけたらと考えています。開催に当たり、準備にご尽力いただいた幹事の方々や「卒40周年記念発起人会」を担われた同期生の方々へ、感謝申し上げます。みなさまのご健勝と、進修同窓会の益々のご発展を祈念しております。(高25回卒 大脇正昭)

卒業25周年記念同窓会

私達高四〇回卒業生は、この度卒業二十五周年にあたり、4月14日(日)開催された記念式典に合わせ、同日ホテルマロウド筑波にて記念同窓会を開催しました。



まずこの場を借りて、この度の記念式典、祝賀会・同窓会にあたり何かとご指導・高配を賜りました進修同窓会並びに母校の関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。クラス幹事が集まり準備を始めた時、何と言つても国内外へ散った同窓生に一人でも多く連絡するというのが最大の課題でしたが、手探りで準備を進める中、当日の手順や予め準備・想定が必要なこと、留意点など様々ご指示・ご助言を頂き、どうにか記念同窓会を開催できたのもその賜物と心より感謝を申し上げます。私達は、つくばで科学万博が開催された昭和六〇年に入學、昭和最後の年六三年に母校を巣立ちました。あれから25年、母校を訪れるのは卒業以来という者も多かつたと思ひますが、当日、式典には約120名が出席しました。久々の母校は旧本館や本館等の変わら

恩師を訪ねて

理科 後藤 直和 先生

在職 昭和二十六年〜四十六年(教諭)



はじめに

今回は全日制、定時制の両方で教鞭をとられた後藤直和先生を訪ね、当時を振り返っていただきました。先生が勤務された頃は、日本が独立国として国際社会に復帰し、高度経済成長を経て、学園紛争が終結に向かうまでの変化の激しい時期でした。誠実に、謙虚に生徒の教育と校務に当たられたお姿をうかがうことができませんでした。

新任の頃

昭和二十六年、私は東京高師を卒業するとすぐに、生物担当の教師として本校に赴任しました。最初の年は全日制と定時制の兼任でした。

当時、全日制一年生の理科は5単位で地学と生物の選択必修でした。生物のクラス数は4で、そのうちの3クラスを先輩の須田先生が持たれ、私が持ったのは1クラスでした。定時制の方は理科は二年生からで、二年生で生物5単位必修、クラス数は2でした。授業の結果である試験の成績がどのようであったかよく覚えてはいませんが、悪くとも気にしな

いでいたように思います。

生活の方は、私は東北の出身で市内に親戚も知り合いもなかったため、最初は本館の宿直室に仮住まいしていました。それから二カ月後に、寄宿舎を改造して保健室や合宿室、定時制職員室等を持つ特別棟が出来たので、その中の畳の部屋に移り、そこで約二年間自炊生活をしました。なおその部屋には物理、化学の担当で先輩の池井先生も住まれ、同室でもお互いに干渉はしない生活で過しました。

一回目の定時制専任

二年目の昭和二十七年から二十九年にかけての三年間は定時制専任として過しました。更に二十八年からは専門外の化学も持つようになり、そのため昼間は私なりに勉強をしながら思っています。また理科のカリキュラムを二年生で化学、三年生で生物、四年生で物理というように替えることを推進したりしましたが、これは私の若気の至りであったかも知れません。

一回目の全日制専任

昭和三十年から三十四年までの五年間は、須田先生と交替して、全日制専任として過しました。最初の年は一年生と三年生のそれぞれ2クラスずつを持ち、一年生の方は特に問題はなかったのですが、三年生の方は受験科目として生物を必要とする生徒がほとんどいなかったのと、生徒の気質が定時制とは全く違っていたこと、私の未熟さなどもあって、授

業では大分苦労しました。

当時は全日制でもカリキュラムがよく変り三十一年には一年生全クラスが化学必修になって私は2クラスの授業を持ち、1クラスの担任になりました。化学は専門外でも定時制での経験が役に立ち、ほぼ問題なく指導できていたと思います。しかし三年生の生物のクラスは前年と同じ様な状況で、更に指導の不手際もあり、大分苦労することになりました。それが原因になったかどうかわかりませんが十二月頃から病気で入院することになってしまいました。病氣休業は約半年続き、学年関係の先生方や生徒にも大きな迷惑をかける結果になったことは、私の教員生活の中で最も慙愧に堪えない事であったと思います。

昭和三十三年の六月に職場復帰してから多少苦労しましたがほとんど問題は無く、特に三十三年と三十四年は三年生の生物の授業もほぼ順調にできたと言える状態になりました。

二回目の定時制専任

昭和三十五年から再び定時制勤務になり、それが四十三年まで九年間続きました。

その九年間にはいろいろなことがありました。以前経験しなかったこととして、勤労青少年の減少などで生徒の気質が変わって来ていて戸惑いがあったこと、保健の授業を担当して卒業学年(四年生)までクラス担任をしたこと、修学旅行の引率をしたことなどがあげられます。修学旅行の引率は二回あり、一回目は東海道新幹線がない時であったのと生徒の事故などで苦労しましたが、二回目は比較的楽に行うことができました。

そのほか学校給食があり、その方の事務を最後の年まで担当していました。給食の内容はパンと牛乳だけ

の簡単なものが昭和三十八年頃に始まり、五年ぐらい続いたあと四十三年の六月頃から米飯の時もある完全給食になったと記憶しています。

昭和四十三年が定時制勤務の最後の年になりましたが、担当した一年生のクラスの教室が旧柔道場であったこと、今はない講堂兼体育館が竣工したこと、授業時間、校務とも多くなって多忙であったことなどが思い出されます。

二回目の全日制専任

昭和四十四年に理数科が発足し理科教員の定数が一名増加になった関係で、全日制に替ることになりました。生物教員の数は昭和三十年代は一人でしたが昭和四十年頃から二人になり、この年からは三人になりました。また理科のカリキュラムも大きく変り、生物は一年生で4単位必修となりました。私はクラス担任を、生物の授業はその1クラスだけでしたが、ほかに普通科全クラスの地学1単位持ったことを覚えています。

その年の最初の定期試験で三年生のあるクラスへ監督に行った時、試験問題の量が多いのと、全生徒が時間の終りまで真剣に取り組む状況を見て驚き、学習への姿勢や意欲の強さに隔世の感を強く持ったものでした。

またその年には、理数科の関係で理科教室棟が新設されることになって、その教室や準備室内部の設計図作成が必要になり、生物室に関しては三人の中で一番若い私がその仕事を担当することになりました。そのため慣れない図面書きや先進校の理科室視察などをしたことが思い出されます。

九年ぶりの全日制の授業や学級経営に特に問題はなかったのですが、学年の終りに近い頃、当時の大学紛争などの影響を受けて過激な行動に

走る生徒が受持クラスから一人出たため、その対策で少し苦労しました。しかしそれに同調する生徒はほとんど現われず、本校内で問題行動に発展することがなかったのは幸いでした。またその生徒は二年生になって間もない頃退学しましたが、その後どうなったかが気になっています。

学年の終り頃、次の年度は化学の授業を持たせて貰い、クラス担任も持ち上ることを希望しましたがそれは通らず、再び新一年の生物担当とクラス担任をすることになりました。その年つまり昭和四十五年は、生物のほか普通科7クラスの地学1単位と理数科の地学3単位を持つことになり、理数科の地学のための勉強がかなり負担になりました。

担任したクラスは、多くの生徒が私に対して信頼感と好意的な気持ちを持っていて、教室の雰囲気も非常に良く、授業も学級活動も気持ちよく進めることができました。また新しい理数科の工事がこの年に進み、年度の終り頃に完成したため、図面作成をした新しい生物室で一時間だけ授業をすることができました。この年が私の土浦一高勤務最後の年になったわけですが、山あり谷ありの経験を積み、爽やかな気持ちで離任することができたのは、私にとつて大きな幸せでした。

おわりに

私が本校に在職したのは二十年間ですが、勤務した年数は定時制の方が長く、また生物という科目は進学のための主要科目ではなかったこともあって、全日制の方で学校に貢献できたことはほとんどないと思います。定時制に関してはある程度貢献できたのではないかと思っています。なお本校離任後は江戸崎西高開校時赴任、水戸二高、竹園高に勤務し、竹園高で定年になりました。

卒業生レポート

18

三つの柱に生きる

昭和三十九年卒

久保内 総子

(津田塾大学同窓会長)



この度思いもかけず進修同窓会会報への寄稿要請をいただき、何故私にとためらいながらも、現在、出身大学の同窓会長をしていることもあり、深く考えることなくお受けしてしまいました。いざ筆を執ろうとしてこれまでの先輩方の立派なレポートを拝読し、何と大変なことをお引き受けしてしまったのかと気がきました。

同窓会誌への掲載記事は、先輩へのロールモデルであったり、生き方を通して人に元気や勇気を与えたり、何らかの有益なメッセージを発したりするものなのに、自分には、後述するように、先の先輩方のような眩いばかりのキャリアはなく、御披露する社会貢献もないのです。さらに、今や母校一高の女子生徒の占有率は高く、キャリア豊富で優秀な女性同窓生が多い中、語るものがないと落ち込んでしまいました。ただ、その時その時に自分の置かれた場所で、何が自分に与えられたことなのかを自分なりに考え、そこでベストを尽くすことを心がけて生きてきたにすぎません。

「自身は、一つの分野を究めた」

キャリアアウーマンではないけれど、社会貢献もボランティアも自分なりに女性の自立と地位向上を目指しながら稚拙に生きてきたロールモデルではないか。これが割合からすると一番多い女性の生き方ともいえるのではないかと、思い直し、一九六四年の一人の女子卒業生として筆を執りました。

私は、父の仕事の関係で、小学校で六回、中学三年で一回転校を経験し、高校に入ってから、高校二年の夏に佐賀県立佐賀高校から一高に編入しました。佐賀にも一高にもまだ旧制中学の風が残っており、まだ女子が少ない一高では、規則もあまりない自由なところでも楽しい高校生活を送れた気がします。ただ、中途編入の悲しさで、物理、化学、世界史、日本史などの科目は、前の学校のカリキュラムとの違いで未修のまま大学入試の受験科目になければならいませんでした。特に化学、物理、日本史については、一高の先生に本当に親身になって相談・指導していただき、私にとっては、慌しいながらも一高で過ごした大学受験時代が真に楽しい記憶として残っています。そして、この時の一高の先生方の熱心なご指導が、後日、私が教師として学生や生徒を指導するときの範となったのです。

母が、男の子のない田舎の旧家の跡継娘としての私に自立して生きることを期待していたせいもあり、受験も医学部でした。結果的には、一期校の前に練習で受けた津田塾大学数学科に入学したのが大きな人生の分かれ道となりました。入学後も諦めきれず、途中、津田で教鞭をとられていた同窓で精神科医の神谷美恵子先生に友人とともに進路変更の相談に乗っていただいたりしながらも(その後友人は小児科医に)、当時黎明期にあったコンピュータに魅せられ、その分野での貢献を考えるようになり、基礎になる、と数学の勉強を続けました。大企業が理系女子を採用し始めたころであったので、卒業後は、東芝でSEとして、大企業をユーザーとして生産管理システムの開発など、自分たちが日本の大型計算機事業を支えているというような大それた気負いした日々を送りました。それが男女雇用均等法など何もない時代のことでした。

結婚後も、仕事優先の別居結婚で行くところまで行こうと仕事を続けたのですが、子の出産をきっかけに悔しい思いで退社し、フリー契約で、システム開発、技術翻訳、ユーザー教育等をし、それまでの経験を生かしました。これがワークライフバランスの二つの分かれ道。子育てしながらの納期との戦い・新知識習得の厳しさは、今置かれている場所での自分を生かすベストの仕事なのかと自問し、見つめ直しました。そして、キャリア一筋ではなく、仕事と家庭と社会奉仕の三つをそれぞれ柱として生きることも自分に与えられたことなのではないかと考えたのです。

一つ目の柱は、ちょうどその時オファアのあった数学・情報教育の教職でした。そこは理系進学も多い女子高でしたが、自分の子育ての経験を生かしつつ常に生徒の立場を考えながら、「自立し、社会貢献できる仕事を得るための進学であり、そのための勉強」の指導は、生徒にとっても自分にとっても明瞭で、なかなか楽しく充実したものでした。

そうこうする中でも、昨今の社会状況をもうに受ける子供たちの存在が気になり、次の世代を担う子を養育する家庭は社会の重要な基本的単位であり、その健全な維持こそ社会にとって不可欠であると考えるようになりました。現在は、家庭裁判所調停委員として、複雑・多様化し、激化する家庭紛争の解決のお手伝いをしていきます。

二つ目の柱は、家庭運営であり、夫や子たちからの評価は別として、子供の養育やハウスキーパーとしての役割をなんとかこなしながらも、常に社会とのか繋がり意識しておりました。

三つ目の柱は、現在の私の生活の一番の支柱になっているボランティア活動です。前述の経過で進化した津田塾大学は、一九〇〇年女性の社会的地位が低い時代に女性の自立のために質の高い教育を与えることを目的として開校されました。その創立の精神は「自立し、社会に貢献する気概のあるオールラウンドな女性の育成」にあり、卒業後も「多くを受け取ったものは、多くを他人に与えなければならぬ」としてその精神が受け継がれていました。

私は、多くの分野で女性初の枕詞がつく輝かしい卒業生もおられる中にも、社会の目立たない場所でもリーダーシップを発揮しながら自立し輝いておられる多くの先輩方の在ることを知りました。「人」のために、自分の大切な時間を使う「ことを実践している人と交わる中で多くのことを学び、現在は、汎太平洋東南アジア女性協会(加盟国二三カ国とともに世界の平和を考え、女性の地位向上を目指す)でもお手伝いをしています。多くの先輩諸氏の努力によって、一九八五年女子差別撤廃条約の批准、一九八六年男女雇用機会均等法施行、一九九九年男女共同参画社会基本法、二〇〇七年の再改正を経て、女性の地位は目覚ましく向上しつつあります。少子化による社会構造の変化から、現政権は、女性の活躍なくして日本の経済成長なしと表明し、成長戦略の一つに「女性の活躍促進」を掲げています。これまで多かったビジュアルを重視した女性の価値より、精神のハンサムウーマンとして凛とした女性の生き方をテーマとする大河ドラマ「八重の桜」も人気を博しています。これらのことは、津田梅子が理念としたものであり、女性の地位が極めて低かった時代におけるその先見性と実行力に、私は感銘を受けています。また、私は、女性というより一人の人間として慣習的な常識にとらわれることなく、それぞれの意思、信念に基づいて着実に歩み続けることが現代にふさわしい大切なことであると思っています。今急速にグローバル化する社会にあつて、ITを駆使する人と人との繋がりにも大きな変化が起きています。そのような中、私は、女子大である母校を元気にするため、同窓会会長として新しい形の魅力ある同窓会造りを目指し、担当者と共にITを使つた緊密なネットワークの構築に努めています。

一高の同窓生、就中女子同窓生の皆様も、繋がることで、何かを始めることで、社会貢献をしてみませんか。

土浦一高創立百二十周年記念事業について

明治三十(一八九七)年に創立された本校は、四年後の平成二十九年(二〇一七)年に創立百二十周年を迎えます。

明治・大正・昭和・平成の四つの時代に渡り、国内外の各界において活躍されている多くの人材を輩出し、卒業生総数は三万四千八百人となりました。

現在本校は、全日制各学年八クラス・生徒数九百五十四名、定時制各学年一クラス・生徒数八十九名、教職員八十五名で、県内の公立高校では最も規模の大きい学校(通信制は除く)となりました。また、難関国公立大への進学者数においても、県内は勿論、全国においても有数の公立高校として名を馳せております。

「自主・協同・責任」の校訓の下、「一高祭」・「一高オリンピック」・「歩く会」の三大行事をはじめ、様々な行事が生徒諸君の実行委員会による企画・立案・運営によって開催されています。また、部活動への参加も積極的で、九〇%近くの生徒が部に加入しており、本当の意味での文武両道を実践しつつ日々励んでいます。

平成二十二年からは、同窓会のご援助を得て、新たな試みとして生徒三十八名を、十一日間米国東部に派遣する海外研修を行っております。「Science Explorers Group(科学の探検隊)」と名付けられたこの海外派遣は、科学に目的を絞った先駆的な研修として、全国の高校からも注目されています。

が盛大に挙行されたほかに、同窓生やPTAの皆様のおかげで、進修記念館の建設、百周年記念誌「進修百年」と同窓会名簿の発行、倉庫兼部室の建設、部室・旧本館庭園の改修工事、記念モニュメント設置、さらに県費で学習館が建設される等々、まさに百周年に相応しい様々な事業が行われ、その後の本校生の学校生活は、大いにその恩恵にあずかっております。

本校のシンボルである旧本館は、明治三十七(一九〇四)年竣工です。で、来年百十周年となります。二つの大震災を乗り越え、現在も吹奏楽部・弦楽部の部室兼練習場として毎日使われています。また、旧本館活用委員の皆様により、毎月第二土曜日の定期公開をはじめ、お花見や学校公開時の特別公開、各種団体からの希望に応じた臨時公開等、年間約五十回、三千名の方々に来館いただいております。その他、特別授業や保護者との面談会場、映画・テレビ・雑誌の撮影場所等々幅広く活用されています。

しかしながら、竣工後百年以上を経過し、いかに堅牢な建物であっても補修が必要になってきています。進修同窓会では、「旧本館校舎改修促進委員会」を設け、改修に向け様々な取り組みを進めていただいております。

また、県教育庁文化課と連携のもと、筑波大の文化財関係の専門の先生方や土浦市の担当課長の方々と交えて「旧本館活用検討委員会」を立ち上げ、重要文化財

としてのさらなる有効活用の道を探っております。

耐震性の面では問題点も指摘されており、まず耐震診断を実施していただき、その後適切な耐震補修を行う方向で、県文化課を中心に検討が進められております。

さて、創立百二十周年記念事業についてですが、現在のところ、記念式典の開催、記念誌の発行、旧本館用トイレ棟新築及び改修に伴う付帯工事(展示物等の収蔵庫)等が予定されております。これらのことについては、募金目標額一億円を含め、平成二十五年度進修同窓会総会にて議決されております。

同窓生の皆様には、また様々なご援助をおおぐこととなりますが、変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

副校長 杉山 博

卒業15周年記念同窓会

去る4月、土浦一高を卒業して15年を経過した33歳前後の若者達が、茨城にて再会を果たしました。

進修同窓会総会が日曜日であったため、遠方からの参加者を考慮し、土曜日に学年同窓会を開催。この会は2年以上前から約15名の幹事で準備を進めて参りました。

当日まで、幹事会はもちろんのこと、同窓会のことを伝えるという名目で、各地でミニ同窓会が始まりました。また、ハガキに加えてメールやFacebookといったインターネットも駆使して皆と繋がりを取り戻していく体験は、同窓会でないといえないものでした。

ただ、それでも連絡が取れない者もあり、この点は非常に残念でした。この会報にて同窓会の雰囲気がいずれも伝わることを期待します。

余談ですが、同窓会直前に関西からつくばに転勤した者もあり、何かを「持っている」

会であったという思いが拭きません。

当日は、同窓生が100名以上。先生方は10名以上お越しくださいました。先生方は15年ぶりとは思えないほどお若くいらつしやう、そのお陰であの頃にタイムスリップしたような感覚に陥りました。むしろ、風貌が変わっていたのは同窓生の方だったでしょう。

司会を私と平島(旧姓：市原)純子さんで行い、学年主任の結城先生を始め先生方からお一人ずつ挨拶を頂きました。懐かしい思い出に加えて、当時の先生方の心境などを初めてお聞きして、ご迷惑をおかけした事を申し訳なく思いました。

歓談では、用意された料理がなかなか減らないくらいに皆が再会を楽しんでおりました。一部ではクラスの同窓会をやろうという話を持ち上がったよう、その場で日程まで決めてアナウンスをしている者もおりました。

最後に、先生方に花束を贈呈し、私達を育てて頂いた事への感謝をお伝えしました。それまで賑やかであった同窓生達も、この時は皆壇上に注目しており、一高生ならではのメリハリを感じました。

翌日は、同窓会総会ならびに祝賀式が開催され、卒業15周年を祝した記念品を拝受いたしました。この場を借りて、感謝を申し上げます。



今後、各所で益々必要とされていくであろう同窓生の活躍はもちろんのこと、先生方や進修同窓会を支えていらつしやうの方々、そして土浦一高の関係者の皆様がいづつまでも元気で過ごされる事を祈念いたします。

(高50回卒 篠原正樹)

4面・周年記念同窓会の続き

ぬ付まいも懐かしく、吹奏楽部と応援リダーが校歌、応援歌を演奏し、傍らに旧友がいれば尚のこと、たちまち在校時に時間が遡ったようでした。

例年、式典後にホテルマロウド筑波にて祝賀会、その前日の土曜日に記念同窓会を開催することが多いようですが、幹事会で検討の結果、私達は式典当日、進修同窓会主催の祝賀会と記念同窓会を同時開催(以下「同窓会」)することにしました。中には、前日、恩師を囲んでクラス会を開催したクラスもあったようでした。

同窓会には式典参加者に加えて多くの同窓生が駆けつけ、戸部守先生をはじめ恩師8名を含めて総勢約170名の参加を得ることができました。

同窓会では、恩師の皆様から当時のエピソード(秘話?)披露や近況のご報告などの他、武井秀一先生(前学長)から現在の母校の様子などお知らせ頂きながら、時の経つのを忘れ、和やかにかつ賑やかに杯を重ねることができました。学年での同窓会は約20年ぶりとなりましたが、貴重な旧交を温める得難い機会となりました。後日、これを契機に複数のクラス会が開催されたと聞くにつけ、今回の記念行事・同窓会の意義をじわり感じる次第です。

最後に、当日まで準備・運営に奔走してくれた幹事各位に改めて感謝を申し上げますとともに、母校の益々の発展と恩師の皆様のご健勝を心より祈念申し上げて結びと致します。

(高40回卒 大川政則)

土浦一高進修同窓会

電話 〇二九八二二〇一三七
FAX 〇二九八二二六三五一

ホームページアドレス

http://www.sin-syu.jp/

支部・同期会だより

東進会

年一回六月に神田神保町の学士会館で総会・懇親会を行い、その企画運営は当番の卒業年次を決めてその卒業生が担当しています。総会前の母校の応援指導部・吹奏楽部又は弦楽部の演技・演奏と懇親会前の会員による講演が好評です。

今年の総会・懇親会の出席者は例年と同じ約一三〇名でしたが、最近若い年次の当番幹事の企画により若手の出席が多くなりました。

総会後懇親会の前に会員が講師となつて講演を行っています。今年は、TBS系列で平成二三年



に放映された「看取りの医者バイク母さんの往診日記」の原作者(昭和五八年卒) 平野国美氏の講演が好評でした。

高齢の患者は、病院で体中パイプをつけられてではなく、自宅で家族に看取られながら最期を迎えられるような在宅医療を目指して奮闘されている平野氏の姿がドラマになったものです。平野氏は男性ですがドラマでは大竹しのぶが看取りの医者を演じています。

これまでの総会での講演は、「激変するパラダイムーベンチャーが面白い」(飯塚哲哉氏)、「日本はどうなるー対アジア外交・対米関係」(堀哲夫氏)、「バリオエタノールについて」(雨貝二郎氏)、裁判員制度始まる『日本の司法はどうなる』大野金一

長、「アイルランドの『ケルト文化』と日本」(鶴岡真弓氏)、「繋がりましようー豊かな人生のために」(鈴木貴美子氏)、「私の宇宙開発」(高野忠氏)、「コーチ型リーダーシップについて」(五十嵐朝青氏)でした。

東進会のその他の行事としては、毎月第二木曜日料理と銘酒を楽しむ「謳杯会」を都内の名店で毎月欠かさず今まで一八〇回開催してきました。(参加者は毎回二〇名前後)

その他毎年五月に東筑波CCCでゴルフ大会を開催しています。

(東進会会長 大野金一)

取手支部

支部の設立について
名簿を見ますと、取手市には六百名超の同窓生が掲載されておりますが、その多くの方は首都圏の玄関口かつベッドタウンとしての本市に住まわれたものでしょう。

一方、他地区の同窓生から、取手には十分な人数がいるのだから支部を設けたらどうかという話が数年来ありましたので、身近な同窓生に相談していただきました。このような中、木内幸男大先輩が「取手市名誉市民ご就任」という慶事が伝えられました。このため、早めに支部を設立してお祝いしようということとなり、同窓生から同窓生への方で出席者を募りまして、都合で出席できない方が多い中、出席予定者のご尽力もあり、発足時の支部会員は十四名です。

二月二十三日、ご来賓として本部から大曾根副会長、母校から杉山副校長をお迎えし、設立総会兼木内幸男氏取手名誉市民就任祝賀会を開催する運びとなりました。設立総会には全員のご賛同を得て、ここに取手支部を発足させることができましたことを感謝申し上げます。

大曾根副会長からは支部設立のお祝いと本部・支部の活動状況、杉山副校長



らは母校や後輩たちの現況など、詳細なご説明があり、一同在学していた頃を思い出しながらお聞きしました。

木内氏への祝辞は、母校を指導された最後の昭和三十一年の母校を務めた萩原孝氏(高九)が、若き木内監督のご指導により野球部史上最強であったといわれる同年のチームの思い出に触れながら、お祝いと感謝を申し上げました。

木内氏からは、謝辞に続き、母校野球部の育成にかかる苦楽などの話が披露されました。我々後輩は、ご本人から初めて聞く話であり、改めて、昭和三十三年・創立六十周年の甲子園出場ができたそもそものを再認識した次第です。

懇談では、年次に違いはありますが、それぞれの母校時代や近況に話が咲いたところでありました。次回は、来年五月に開催する予定です。どうぞご出席ください。

支部長 海東宗平(高十二)

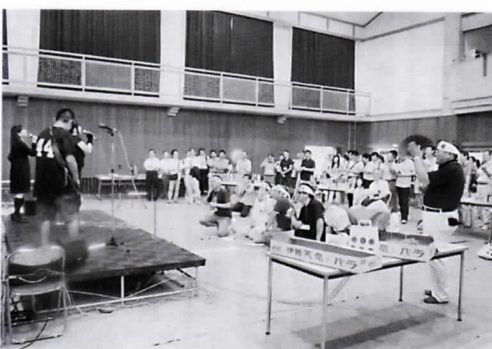
卒業30周年記念同窓会を開催して

全日制普通科35回理数科12回卒業生

幹事代表 塚本 一也

「学校でやつたらみんな集まるんじゃないかなあ...」それは、無責任な一人の幹事の呟きから始まった。5年毎に同窓会を開催しようと約束した私達幹事団は、卒業30周年記念同窓会の企画を居酒屋で練っていた。前回は懐かしさの想いがあつたけど、今回は集客力のある企画を準備しないと平凡な飲み会になってしまうだろう。そんな不安から企画会議は行き詰まっていた。

夏休み期間の方が皆参加し易いのではないのか?しかし既に5月の今となつては会場の予約が取れないだろう。そんな議論をしている時に、その意見が飛び出した。「もう一回一高祭やっちゃおうか、バンドとかさ...」それ、面白いね、やるか?」酒の勢いとは恐ろしい。8月31日(土)に卒業30周年記念同窓会を土浦一高同窓会館にて開催する。バンドは当時のヒット曲を演奏して、ボーカルは一高の制服を着用する。以上が、その日の幹事会で決まった内容である。しかし、全てゼロからのスタートであつた。



それから、3か月間は実に忙しい日々を送った。メールは常にチャット状態であり、週に3回ぐらい同級生と顔を会わせた。学生時代にはほとんど話したことのない同級生と、友達の間で話しかけがいつの間にか、今更だ、苦しかったけど本当に充実していた3か月間であつた。気が付くとお盆が過ぎてその日を迎えていた。私達の努力の集大成は「30」にアップしてあり、「土浦一高卒業30周年記念同窓会」で検索できる。企画から編集まで全て自らの手で作った記念碑である。「50歳を目前にしてこんな事をやってみよう皆さんから元気をもらいました」「忙しいようにしている幹事の皆さんが生き生きとした姿に感動しました」等々、この同窓会を通じて本当に勇気と自信を得たのは私達幹事の方だったのではないだろうか。

末筆となりましたが、酷暑の中最後までお付き合いくださった先生方、遠路はるばる足を運んでくれた100名にも及ぶ同級生の皆様、同窓会館使用に際してご配慮いただいた学校関係者・同窓会事務局の皆様には、心から感謝の意を表したいと思ひます。最後にバンドのメンバー、本当に協力ありがとうございました。また、お会いしましょう。

母校だより

第六六回一高祭

三年D組 横瀬 哲也

こんにちは。第六六回一高祭で実行委員長を務めました、横瀬と申します。一高祭が無事閉幕してから早くも四か月近くが経とうとしています。一高祭当日のこと、そしてそれまでの様々な準備のことが今でも昨日のよう

に思い出されます。私が一高祭の実行委員長になったのは昨年の一高祭終了後すぐのことでした。反省会議の場で新委員長に任命され、委員長として仕事を全うできるのか心配で仕方ありませんでした。一番の不安要素が「規模の大きさ」です。歴代の先輩方のご尽力により、最近では二日間合わせておよそ六千人もの



お客様をお迎えする大きな行事になりました。そんな一高祭で、九〇人以上の生徒を動かしていくことができるのか私にとって最大の課題ではないかと考えたのです。

しかし、そうではありませんでした。私も所属した運営委員会を含め、九つの委員会がそれぞれ責任を待って自分たちの仕事を行ってくれたおかげで、私は安心して委員長としての仕事をすることができました。もちろん、すべてが滞りなく進んだというわけではありません。難題に直面し、打開策が見つからない場面があったのも事実です。それでもあきらめずに議論を続け、解決してくれたメンバーをみて、改めて「一高生の力」の大きさを実感しました。二日目の閉祭式では、サブライズとして私の誕生日を祝ってくれたという、最後まで私の期待をいい意味で裏切ってくれた仲間を持ったこと、そしてそんな仲間と一高祭をつくりあげてくれたことに感謝したいと思います。

さて、こんなメンバーとともに続けてきた努力の甲斐あって、一高祭当日は昨年を超える多数のお客様にご来場いただきました。お楽しみいただけたでしょうか。本年度の一高祭のテーマは「羅針盤」でした。委員会が、クラスが、ひとりひとりが、明確な目標を待って臨んでもらいたいという思いで設定した目標でしたが、そ

れぞれがこのテーマ通り、一高祭の成功という大きな目標に向かって懸命に準備をしてきた成果がしっかりと現れた二日間になったのではないかと思っています。そして今回の私たちの思いは、間違いなく後輩たちにも伝わっているはずです。すでに第六七回の一高祭に向けて活動を開始している委員会の様子を見ると、きつと来年の一高祭はさらに進化を遂げたものになるでしょう。後輩たちには、これまでの一高祭の伝統を、さらに良いものへとしていってほしいと思います。来年は一來場者として、一高祭を楽しみたいと考えています。

最後になりましたが、第六六回一高祭の開催に向けてご協力いただいた先生方や保護者の皆様方、地域の方々に改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。そしてこれからも、一高祭へのご協力をよろしくお願いいたします。



職員室だより

芸術科より

音楽担当 塚田 由香子

音楽室は、特別棟の四階、図書室の隣にあります。今年は168名の1年生が「音楽I」を履修しています。音楽を一生の友とする一助になりたいと授業を進めています。1年生では多様な表現活動(独唱・合唱、ギター、創作や工夫を凝らしたアンサンブル演奏など音楽の素養を持つ生徒の多い本校ならではのものを)をとおして、表現することそしてその楽しさを、また同時に応答する観客としての両面からの体験は得難いものでしょう。鑑賞では、生徒たちの年代ではなじみのない日本音楽も取り上げますが、なかなか楽しいようです。また3年生では文系選択科目として「音楽II」があり、こちらはソルフェージュや楽典など受験対応の内容となります。



10月12日、つくば市カピオアリーナで第38回全国高等学校総文祭プレ大会の総会開会式が開催され、23部門の代表生徒として本校からも3名が出場しました。写真は、第1部式典音楽を3校で勝田高と本校の弦楽器、

茨城高校の管・打楽器・オーケストラを編成して演奏しました時のリハール風景です。来年の本大会ではさらなる活躍が期待されます。

美術担当 福田 政司

土浦一高美術科では油画による自画像制作の課題が終わった時に、生徒相互で作品鑑賞を行い、自分が気に入った作品について感想を書いてもらうと同時に、自分が描いた作品についても制作後記を文章にまとめて発表している。プロジェクトで大画面に大写しにされた自分の作品について発表するのは照れるし恥ずかしいものだが、発表すること、観てもらふことを前提とした制作は自然とやる気が起こり真摯に自分と向き合えるように思う。



作品を観ながら友だちの発表を聴き、制作意図を知ったり制作の工夫に気づくことは作品を理解する上で大きな助けとなることだろうし、自分の作品であれ他人の作品であれ、無理にでも良いところを見つけて、その美しさを感じて文章にまとめ、賞力を向上させることに繋がると信じている。

10面へ続く

9面からの続き

部活動報告

地 学 部

部長 2年H組 中村 研太

我々土浦第一高校地学部は、3年生の3名が引退し現在2年生7人、1年生5人の計12人で活動しています。皆々個性豊かな性格の持ち主ですが、常に賑やかで楽しくやっております。

現在は、「土砂崩れの研究」がメインの活動内容です。モデル実験として、板の斜面に土砂を積んでそこへ放水することで土砂崩れを再現し、結果から様々な考察をします。まずは土砂崩れの発生条件について検証し、次に、土砂に含まれる粒子の大小と土砂崩れ発生の関係性を調べました。現在では、土砂の含む水分量と土砂崩れ発生のしやすさの検証を行っています。研究は昨年始まったばかりで、まだまだ駆け出しではありますが、その間に左記のような結果を残す事に成功しています。

昨年の茨城大会地学部門でこの土砂崩れの研究によって、地学部門1位を獲得し、今夏に長崎県で行われた全国高等学校総合文化祭(総文祭)への出場を果たしました。総文祭では日本中のハイレベルな研究を行う高校が集って研究発表を行うため、大変大きな刺激を受けました。結果として入賞する事はできませんでしたが、この機会に得た物は計り知れないと思っております。

来年の総文祭は茨城県で行われます。我々茨城県の高校生はメイ

ンとなって運営を行う立場となります。全国の高校生に茨城県の素晴らしさを理解してもらえように尽力する所存です。また、再び全国総文祭に出場し、より良い成績を収められるように研究に励んでいきたいと思っています。

その他にも研究発表の機会を求め出かけています。その度に多くの研究者の方々から助言をいただきました。例えば、7月の産業技術総合研究所(産総研)の一般公開の際、土浦一高の地学部の研究発表のポスター発表ブースを設けていただき、一般の方から地学専門の方まで、幅広く意見交換ができました。また、5月に幕張で行われた日本地球惑星科学連合2013大会でポスターセッションを行った際には、土浦一高のOBで地学の研究をなさっている先輩に出会い、研究協力の合意をいただいた事もありました。このように、我々は単に学校内で研究を自己完結させるのではなく、学校外



に出向いて活動することで、実験の質を高め視野を拡大するように努めています。

また我々の活動は他にもあります。「自作プラネタリウムの作成」です。以前より一高祭で既製のプラネタリウムで上映会を行ってきましたが、老朽化が激しく故障して使えなくなっていました。そこで7年前から全て自作のプラネタリウムを設計・製作し、試行錯誤の末に完成させました。その後も改良を重ね、現在では3代目で上映を行っています。今では、年2回程度つくば国際会議場で上映会を開催する機会も与えて頂き、観覧者に好評を得ています。現在、改良4号機を設計中です。決して簡単ではない試みですが、こういった真新しい経験ができるのも、土浦一高地学部ならではの思いです。

その他の活動として、毎年夏休みと冬休みに天体観測の合宿を行っています。茨城県内の高校生が集まって交流を深めつつ、天体望遠鏡等の器具を並べて皆で多くの星座や惑星を観察します。普段は見ることのできないものも天体望遠鏡によって見られるため、貴重な経験となります。また、この合宿は天体観測だけではなく、ワークショップや施設見学を通してサイエンスへの見聞を深める活動もします。

以上が我々土浦一高地学部の主な活動内容となります。大変な面もありますが、基本的に仲良く楽しくやっています。我々の活動が、我々一人ひとりの糧となり、引いては将来の社会貢献に繋がれる事を、強く願っております。

第48回全国定通陸上競技大会

顧問 櫻井 敏己

来年から改修のため、最後の国立競技場での競技会に、一年生の砂田修吾君は男子15000mに、三年生の中川紘志君は男子走り幅跳びに出場しました。砂田君は4分53秒で、決勝タイムは4分34秒で、決勝進出にはわずかに及びませんでした。中川君は6・13歳で全国第2位に入りました。兩名とも土浦一高生として、全国でも引けをとらない成績を残し、とてもすばらしい財産となり、自信を深めることができたと思います。また8月の12日・14日という忙しい時でさえ、兩名の保護者も国立競技場に駆けつけて、みんなで大きな声援を送ったこともすばらしいことでした。定時制の皆様の声援ありがとうございました。



全国定通剣道大会を終えて

(武道部 剣道)

顧問 小神野 文彦

平成25年8月4日日本武道館にて全国高等学校定通剣道大会が行われました。本校定時制からは、1年入田杏孝(二段)、3年小関雄飛(二段)が個人戦と団体戦の主力として参加し、入田が個人戦で3回戦まで勝ち上がり、結果ベスト16入りを果たしました。

剣道部は、今年度より男子部員3名、女子部員1名で産声を上げ、全国大会入賞を目標に放課後の限られた時間の中で緊張感のある稽古をしてきました。今大会で良い成績が残せたと言うことで、部員の士気も高まっており、来年度の全国大会も本校剣道部が、茨城県定通部の主力として活躍してくれることを確信しています。



進路状況報告

平成二十五年度入試報告

東大・京大・東工・一橋31名

東大24名で昨年に続き健闘

筑波大42名

進路指導部長 木村 幸彦

平成25年度入試は、前年度よりセンター試験の平均点大幅にダウンと、ここ数年進んでいる後期日程の廃止のため、全国的には弱きな出願傾向がみられた。

センター試験志願者数は、約57万3千人で、前年度より約18、000人増であったが、国公立の志願倍率は4・84倍(国立4・44、公立6・44倍)で、前年度の4・91倍よりやや低下した。これは、先に述べたとおり、センター試験の平均点ダウンと難関国立大学の後期日程の廃止により難関大学前期志願者の後期の受け皿が減少したこと、ここ数年の経済の低迷や近年の受験生(保護者)気質などから「無理せず、より確実に、あるいは地元」という安全志向がさらに強まったことによる。学部系統別では、相対的に「理系人気」の傾向が続いているが、文系学部も人気低下に歯止めがかかってきているようである。

大学入試センターの発表によると、国語で17・0点、数学ⅠAで18・8点と大きく平均点がダウンした。センター試験で思うように得点できなかった受験生は、この2科目で失敗しているケースが多い。本校生の平均点は、文系が661・3点(昨

年比―26・0点)、理系が662・2点(昨年比―31・9点)と文系理系とも全国平均並にダウンしたが、全国的な傾向に反し、初志の希望を貫き、第一志望に挑戦した生徒が多かった。このため、現役合格率は、やや低かったが、次年度に期待が持てる。

今春の入試結果について、主なものを挙げると以下のようである。

東京大学24名(新卒13名)
京都大学2名(新卒1名)
東工大学4名(新卒3名)
一橋大学1名(新卒0名)
東北大学19名(新卒9名)
筑波大学42名(新卒25名)

国公立大医学科17名(新卒5名)
東大は昨年度22名、今年度24名と2名増加し、20名台をキープした。内訳は、現役で、文一に1名、文二に3名、文三に1名と5名が合格した。理系は理科一に5名、理科二に3名であった。残念ながら、後期日程では合格者はでなかった。現役合格者数の13は全国の公立高校と比較した場合、見劣りしない数字である。全体の合格者数を伸ばすには、浪人をして受験する生徒の数をどう確保するかが鍵である。昨年度の卒業生にも、後一步で涙を飲み、再挑戦する者も数多くいる。次年度入試の結果が待たれる。地元筑波大は、42名が合格。昨年より9名増加したが、東北大は19名で、やや減少した。総じれば、難関国公立を目指す姿勢を変えずに健闘したといえる。

平成25年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

*新卒は内数です

大 学	合格者	新 卒
旭 川 医 科 大	1	1
北 海 道 大	4	2
岩 手 大	1	
東 北 大	19	9
秋 田 大	2	1
山 形 大	4	
茨 城 大	13	5
筑 波 大	42	25
群 馬 大	1	
埼 玉 大	2	1
千 葉 大	10	4
お茶の水女子大	7	4
電 気 通 信 大	3	1
東 京 大	24	13
東京医科歯科	2	1
東京海洋大	2	2
東京外語大	4	2
東京学芸大	3	1
東京芸術大	1	
東京工業大	4	3
東京農工大	5	2
一 橋 大	1	
横浜国立大	4	2

大 学	合格者	新 卒
金 沢 大	1	
山 梨 大	2	
信 州 大	3	1
名 古 屋 大	4	2
京 都 大	2	1
大 阪 大	2	1
奈 良 女 子 大	1	1
島 根 大	2	1
山 口 大	1	
長 崎 大	1	
大 分 大	1	
宮 崎 大	1	
琉 球 大	1	
国際教養大	1	
埼玉県立大	1	1
首都大東京	1	
都留文科大	1	
岐阜薬科大	1	
京都府立医科大	1	
国公立大計	187	87
(うち医学科)	17	5
大月短期大	1	1

大 学	合格者	新 卒
青 山 学 院 大	15	10
学 習 院 大	14	10
慶 応 大	44	21
国際基督大	5	3
上 智 大	17	6
中 央 大	22	4
津 田 塾 大	1	
東京女子大	7	6
日本女子大	19	14
東京理科大	55	24
明 治 大	70	28
立 教 大	28	13
早 稲 田 大	73	27
法 政 大	33	16
北 里 大	6	3
芝 浦 工 大	15	9
日 本 大	10	6
同 志 社 大	4	
立 命 館 大	1	
そ の 他	92	41
私 立 大 計	531	241
合格者総数	719	329

平成24年度 進修同窓会決算書

収入総額 15,019,846円也
支出総額 12,228,988円也
差引残高 2,790,858円也 (平成25年度へ繰越)

【収入】 単位:円

項目	予算額	決算額	比較増減(△)	備考
1 繰越金	2,877,873	2,877,873	0	前年度繰越金
2 終身会費	60,000	210,000	150,000	7名
3 年会費	8,000,000	8,232,000	232,000	2,514名
4 入会金	1,750,000	1,725,000	△25,000	新会員 計345名×5,000円
5 繰入金	1,800,000	1,800,000	0	
6 寄付金	0	174,732	174,732	下記のとおり
7 雑収入	127	241	114	預金利息
合計	14,488,000	15,019,846	531,846	
ご寄付者名	高39回高理16回卒業生ご一同様・茨大桜水会・NP0法人文化遺産保存のための映像記録協会			

【支出】 (残額欄の△は決算額が予算額を超過していることを示す。)

項目	予算額	決算額	残額	備考
1 総会補助	1,200,000	1,065,281	134,719	総会資料、会場設営等
2 会報発行費	3,400,000	3,278,311	121,689	会報印刷、発送
3 通信費	100,000	129,730	△29,730	切手、はがき
4 卒業記念品費	250,000	211,324	38,676	卒業証書ホルダー
5 卒業周年記念品費	500,000	500,000	0	卒業周年記念品積立
6 会議費	200,000	332,062	△132,062	役員会、評議員会経費
7 支部連絡費	300,000	320,000	△20,000	支部会補助
8 生徒奨励費	1,500,000	1,209,000	291,000	生徒会補助等
9 生徒活動補助費	1,700,000	1,541,684	158,316	各部活動用品、
10 別途積立金	0	0	0	
11 慶弔費	100,000	0	100,000	
12 事務局費	1,000,000	801,508	198,492	担当者手当、郵便振替手数料等
13 旧本館活用事業費	710,000	587,610	122,390	事務用品等、
14 海外研修旅費	1,000,000	72,975	927,025	生徒海外研修諸経費
15 生徒活動特別補助費	1,800,000	1,796,025	3,975	防犯カメラ装置設置
16 旧本館改修促進費	500,000	383,478	116,522	県外視察旅費
17 予備費	228,000	0	228,000	
合計	14,488,000	12,228,988	2,259,012	

上記のとおり決算しました。

平成25年4月14日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 浩史

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

監事 熊木 士郎 ㊞

平成25年3月7日

監事 松井 泰寿 ㊞

平成25年度 進修同窓会予算書

収入総額 12,601,000円
支出総額 12,601,000円
差引残高 0円

【収入】 単位:円

項目	予算額	前年度予算額	比較増減(△)	備考
1 繰越金	2,790,878	2,877,873	△87,015	前年度繰越金
2 終身会費	60,000	60,000	0	
3 年会費	8,000,000	8,000,000	0	
4 入会金	1,750,000	1,750,000	0	350名(全320・定30)×5,000円
5 繰入金	0	1,800,000	△1,800,000	
6 雑収入	142	127	15	預金利息
合計	12,601,000	14,488,000	△1,887,000	

【支出】

項目	予算額	前年度予算額	比較増減(△)	備考
1 総会補助	1,200,000	1,200,000	0	資料、会場設営等
2 会報発行費	3,400,000	3,400,000	0	会報印刷、送料
3 通信費	150,000	100,000	50,000	切手、はがき等
4 卒業記念品費	250,000	250,000	0	卒業証書用ホルダー
5 卒業周年記念品費	1,000,000	500,000	500,000	卒業周年記念品
6 会議費	500,000	200,000	300,000	役員会、評議員会等経費
7 支部連絡費	400,000	300,000	100,000	支部会補助
8 生徒奨励費	1,500,000	1,500,000	0	生徒会補助、生徒会活動功労賞
9 生徒活動補助費	1,000,000	1,700,000	△700,000	部活動補助
10 別途積立金	0	0	0	
11 慶弔費	100,000	100,000	0	
12 事務局費	1,000,000	1,000,000	0	担当者手当、郵便振替手数料等
13 旧本館活用事業費	810,000	710,000	100,000	
14 海外研修旅費	500,000	1,000,000	△500,000	生徒海外研修引率旅費
15 生徒活動特別補助費	0	1,800,000	△1,800,000	防犯カメラ設置費
16 旧本館改修促進費	500,000	500,000	0	改修促進事業、県外視察旅費
17 予備費	291,000	228,000	63,000	
合計	12,601,000	14,488,000	△1,887,000	

※項目間の流用を認める。

上記のとおり提案いたします。

平成25年4月14日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 浩史

編集後記

会費納入のご協力とお願い

平成二十四年度会費納入状況は、二五二名の皆様方から八四四、〇〇〇円を納入していただきました。会費は、各事業項目に充てられますので、ご協力よろしくお願い致します。

進修同窓会規則(抜粋)

第十二条 本会の経費は第十条の入会金、年会費、終身会費及び第3条寄付金を以て充てる。一、年会費は、六年目以降は、三千円以上とする。二、終身会費は、三万円以上とする。

平成二十六年年度 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会・卒業周年記念祝賀式は、次の通り開催いたします。

一、期日 平成二十六年四月十二日(土) 午後一時
二、会場 土浦第一高等学校体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業60周年	高6回、定4回
卒業50周年	高16回、定14回
卒業40周年	高26回、定18回
卒業30周年	高41回、定33回
卒業25周年	高51回、定43回
卒業15周年	高11回、定9回

一般会員・周年記念該当会員の数多くの皆様方から母校の門をくぐられることを期待しております。尚、総会・祝賀式終了後、会場を移し市内ホテルにて祝賀会懇親会を開催いたします。

各界で活躍されている方々からの寄稿を掲載しております。同窓会事務局(土浦一高)まで紹介等お願い致します。

▽今年も残り少なくなりました。来々年からの消費税アップをはじめ生活に直結する経済面で、たくさんの課題を抱えています。安心して暮らせる希望の年を迎えたいものです。会員各位のご多幸祈念いたします。

進修同窓会会報70号
発行日 平成二十五年十二月一日

会報編集委員
編集委員長
編集委員

校内

瀬石 杉大 宇鈴 鴻鈴 堀谷 長富 青山
能井 山塚 川木 木越 中戸 永山 田
明 健仁 志 義 良 道 和 隆
美孝 博司 郎郎 茂人 博雄 琴也 義士